

# Risk Flash No.188 (Vol.5 No.30)

発行：滋賀大学経済学部附属リスク研究センター  
発行責任者：リスク研究センター長 久保英也

- 教育の視点：「ヒストリーボーイズ」と英国の学校の歴史学習・・・・・・・・・・Page 1
- 論文紹介：Ownership Structure, Audit Fees, and Audit Quality in Japan・・・・・・・・・・Page 2
- リスク研究センター通信・・・・・・・・・・Page 3

## 教育の視点

### 「ヒストリーボーイズ」と英国の学校の歴史学習

社会システム学科教授 ロバート・アスピノール

「ヒストリーボーイズ」は英国の脚本家アラン・ベネットによる芝居です。2004年にロンドンで上演され、2006年にはブロードウェイでも上演、数々の賞賛に値する賞を獲得しました。また2006年には芝居とほとんど同じキャストによる映画も作られ成功しています。

これは1980年代はじめのヨークシャー北部のイングリッシュ郡にあるグラマースクールでの話で、オックスフォードかケンブリッジ（オックスブリッジ）へ入りたい8人の学生の物語です。ストーリーは、自身、ヨークシャーの労働者階級からオックスフォードに入学したベネットの生い立ちを反映しています。私もヨークシャー西部のランカシャー州のマンチェスターで、この物語の学生たちとほぼ同時期にグラマースクールへ通っていたこともあり、この話に大いに興味をもちました。私も同じように、この劇の核心となる科目である歴史と英文学を専攻しました。学部こそオックスブリッジへ進みませんでした、博士課程をオックスフォードで勉強しましたので、この大学で学んだ経験もあります。

この劇の重要な部分は、一風変わっていますが、知識を得ることに喜びを持つ教師のヘクターと、学生をオックスブリッジへの入学試験や面接に合格させることばかりに腐心する野心的な校長が、皮肉で冷酷な教育法を導入しようとして雇った教師のアーウィンとの緊張状態にあります。この劇の最大の見せ場は、試験へ向けて学生たちが集中して勉強する時です。歴史と英文学では、試験は特定の質問に小論文を書いて答えることになっています。学生たちは、これに関してはすでによくできていました—もしできていなかったら当然オックスブリッジを狙おうとはしなかったでしょう。しかしアーウィンは、ただ「良い」小論文を書くだけでなく、それ以上のものを要求しました。すなわちもっと刺激的かつ独創的なアイデアを要求したのです。ある場面で、アーウィンは、学生たちに、誰かがスターリンをモンスターのよう描写しようとしたとして、その反論を述べてみよと言います。彼は学生たちにこう言うのです。「今日では、歴史とは信念の問題ではない。歴史とはパフォーマンスだ！エンターテイメントだ！もしそうでないならそうであるようにすべきだ」（下記文献P.35）

ベネットがアーウィンの教育法に批判的で、一風変わったヘクターの教育スタイルにより強い共感を覚えているのは明らかです。私は、小論文を書くこと、それは英国では人間性を扱う根幹にかかわるもので、若者たちに首尾一貫した説得力のある方法で研究をし、自分の考えをまとめることを教えるにはとても効果的な方法であると思っています。しかしながら、ただ賢く見せたり面白く見せたりするためだけに、そつのない論点を展開する小論文を書くということは教えたくないとするベネットに私は賛成です。学生には、しっかりした分析力を持つことと、「独創的」であるふりをすることなく、いかに良い小論文を書くかを教えるべきでしょう。

#### 参考文献

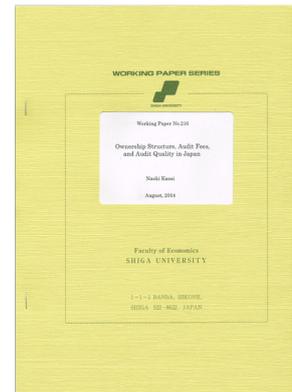
*The History Boys: A play by Alan Bennett* New York: Faber and Faber, 2004

## 論文紹介

Ownership Structure, Audit Fees, and Audit Quality in Japan

著者：滋賀大学経済学部准教授 笠井直樹

収録：Working Paper Series, Shiga University (216)



### 著者のつぶやき

本研究では主に、企業の外部（会計）監査を担う公認会計士と企業固有のコーポレート・ガバナンスの仕組みとが相互に連携して、あるいは連携せずに、結果として経営者による利益マネジメント（本稿では主に会計処理方法の変更を通じた会計利益額の調整という意味）にどのような影響を及ぼしているのかに関して公開データを使って分析を行っています。

本稿の分析対象の一つである、企業の外部監査を担う公認会計士の役割については、これまで主に「監査論（会計学における一応用分野）」という領域において取り扱われてきたのですが、近年、隣接分野であるコーポレート・ガバナンス研究の研究成果を取り込もうという機運が高まっています。外部監査人と企業固有のコーポレート・ガバナンスの仕組みとの連携の必要性というのは、よくよく考えれば至極当たり前のことなのですが、昨今のオリンパス事件等を契機に規制当局や研究者等において改めて注目を集めているようです。

本論文の問題意識は、上記のような近年の会計・監査規制等の動向やそれと連動した研究動向等を背景としつつも、私が「監査論」分野においてこれまで行ってきた研究の過程で感じたことがベースになっています。例えば、わが国における外部監査制度は他の諸外国と比べてあまり機能していないのではないかと、あるいは外部監査制度を代替する仕組みがわが国には長らく存在していたので、外部監査制度の必要性が他の諸外国よりも相対的に低いのではないかと、といった考えがそれに当たります。仮にも外部監査制度を研究対象にしている者が思い至ってはいけない（？）ことなのかもしれませんが、あまりその点は気にせず論を進めます。

また、コーポレート・ガバナンスの仕組みといっても多岐にわたるので、今回の論文では、株式所有を通じたメインバンク等の金融機関等による企業のモニタリングに着目し、これと外部監査人の行動とが経営者による利益マネジメント行動に及ぼす影響について分析を行いました。分析の結果、金融機関等によるモニタリングが厳しい可能性のある企業に関しては、多少独立性に問題のある監査人が外部監査を担当していた場合であっても、結果的には経営者による利益マネジメントを抑制する傾向にあることが明らかとなりました。もちろん、オリンパス事件や大王製紙事件等においては、企業を規律付ける仕組みが機能していなかった点が大きな論点として取り上げられた訳ですが、本研究の分析結果はあくまで、多数の上場企業を分析対象として統計分析を行うと、平均的に上記のような関係が観察されたという事実をいっているに過ぎません。より詳細な企業行動のメカニズムを明らかにするためには、事例分析等のアプローチも必要ですが、この点は今後の課題としておきたいと思います。

最後になりますが、昨年度本研究を国際学会で報告した際、オーディエンスの出身地によってリアクションが異なった点が印象に残っています。例えば、米国出身の研究者は金融機関等によるモニタリングということ自体の意味があまり理解できないようでしたが、欧州出身の研究者はその辺りの事情をよく理解し、関心を持ってくれました。私の言語能力の問題が大きく寄与していると思いますが、今後は米国人研究者にも理解してもらえるよう、よりストーリーを単純化しつつも諸外国の制度に対しても何らかのインプリケーションのある研究を行えるよう精進する必要性を感じました。

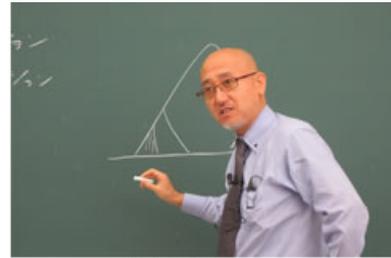
## リスク研究センター通信

### ◆卒業生による特別講義が行われました

<http://www.econ.shiga-u.ac.jp/main.cgi?c=topics:1652&r=0>

11月11日(火)、陵水教育振興人材バンク制度に基づき、陵水会(同窓会)会員の久野康成氏(平成元年卒業)を客員講師にお迎えし、特別講義がおこなわれました。

豊富な実務経験に基づく講義を拝聴できた事は、これから実社会にでる学生たちにとって貴重な機会となったことと思います。



久野客員講師

### ◆日本学生経済ゼミナール関西ブロック大会で久保ゼミが7年連続の優秀賞を受賞

2014年11月23日(日)に日本学生経済ゼミナール関西ブロック大会が龍谷大学で開催され、関西地域の大学107ゼミが参加し、16の分野に分かれ日ごろの研究成果とプレゼンテーション能力を競いました。

滋賀大学からも7ゼミ16チームが出場し、その中で、久保ゼミが各分野の第1位に送られる「優秀賞」を7年連続で受賞する快挙を達成しました。



優秀賞受賞者と久保教授

### 「リスクフラッシュご利用上の注意事項」

本規約は、滋賀大学経済学部附属リスク研究センター(以下、リスク研究センター)が配信する週刊情報誌「リスクフラッシュ」を購読希望される方および購読登録を行った方に適用されるものとします。

#### 【サービスの提供】

1. 本サービスのご利用は無料ですが、ご利用に際しての通信料等は登録者のご負担となります。
2. 登録、登録の変更、配信停止はご自身で行ってください。

#### 【サービスの変更・中止・登録削除】

1. 本サービスは、リスク研究センターの都合により登録者への通知なしに内容の変更・中止、運用の変更や中止を行うことがあります。
2. 電子メールを配信した際、メールアドレスに誤りがある、メールボックスの容量一杯になっている、登録アドレスが認識できない等の状況にあった場合は、リスク研究センターの判断により、登録者への通知なしに登録を削除できるものとします。

#### 【個人情報等】

1. 滋賀大学では、独立行政法人等の保有する個人情報の保護に関する法律(平成15年5月30日法律第59号)に基づき、「国立大学法人滋賀大学個人情報保護規則」を定め、滋賀大学が保有する個人情報の適正な取扱いを行うための措置を講じています。
2. 本サービスのアクセス情報などを統計的に処理して公表することがあります。

#### 【免責事項】

1. 配信メールが回線上の問題(メールの遅延、消失)等によりお手元に届かなかった場合の再送はいたしません。
2. 登録者が当該の週刊情報誌で得た情報に基づいて被ったいかなる損害については、一切の責任を登録者が負うものとします。
3. リスク研究センターは、登録者が本注意事項に違反した場合、あるいはその恐れがあると判断した場合、登録者へ事前に通告・催告することなく、ただちに登録者の本サービスの利用を終了させることができるものとします。

#### 【著作権】

1. 本週刊情報誌の全文を転送される場合は、許可は不要です。一部を転載・配信、或いは修正・改変してblog等への掲載を希望される方は、事前に下記へお問い合わせください。

\*尚、最新の本注意事項はリスク研究センターのホームページに掲載いたしますので、随時ご確認願います。

\*当リスクフラッシュをご覧頂いて、関心のある論文等ございましたら、下記事務局までメールでお問い合わせください。

発行：滋賀大学経済学部附属リスク研究センター

編集委員：ロバート・アスピノール、大村啓喬、菊池健太郎、  
金秉基、久保英也、柴田淳郎、得田雅章、山田和代

滋賀大学経済学部附属リスク研究センター事務局 (Office Hours:月一金 10:00-17:00)

〒522-8522 滋賀県彦根市馬場1-1-1 TEL:0749-27-1404 FAX:0749-27-1189

e-mail: [risk@biwako.shiga-u.ac.jp](mailto:risk@biwako.shiga-u.ac.jp)

Web page : <http://www.econ.shiga-u.ac.jp/main.cgi?c=10/2>